

30軒余りが地域内で新規就農

4月に市が運営する有機農業の学校が開校



←↑ 橋本有機農園

消費者団体「食品公害を追放し安全な食べ物を求める会」の収穫感謝祭 →



30人余りの有機農家がいて先輩方々から学びながら野菜作りに取り組んできた。

現在「市島町有機農業研究会」の生産者は2軒で「食品公害を追放し安全な食べ物を求める会」、「有機野菜つどいの会」などに出荷、その他、市島有機農業生産組合にも加入していて、コープ自然派、自遊人等にも出荷している。

春夏には茄子、ピーマン、トマト、オクラ、ズッキーニ等、秋冬にはハクサイ、キャベツ、ほうれん草、小松菜など約1町の圃場で年間40品目くらいの野菜を作付けている。採卵用の鶏も平飼

高品質な堆肥や鶏の飼料づくりにつとめる

市島町は有機農業の歴史が古く、1975年に阪神間の消費者団体からの要請で生産者団体「市島町有機農業研究会」が設立された。私が有機農業を開始したのが1989年で町内にはすでに30人余りの有機農家がいて先輩方々から学びながら野菜作りに取り組んできた。

橋本慎司 はしもと しんじ プロフィール
兵庫県有機農業研究会代表理事、日本有機農業研究会幹事、IFOAM（国際有機農業運動連盟）アジア監事、兵庫県認証食品協合理事、丹波市農業委員、丹波市有機の里づくり協議会理事、市島有機たい肥センター委員長

1961年 広島生まれ
1978年 高校時代、父の転勤にともないブラジルで過ごす
1985年 国際基督教大学卒
1989年 コープ神戸退職後、丹波市市島町に移り住んで市島町有機農業研究会に入会、就農
1996年 IFOAM アジア・インド大会でIFOAMアジア理事に就任
1998年 IFOAM アジア代表理事に選任
2001年 有機JAS取得
2002年 国際的な有機農業普及活動が認められ、国際有機農業運動連盟貢献賞を受賞
2006年 URGENCI（国際CSAネットワーク）理事に就任
現在、平飼採卵鶏200羽と神戸阪神間の消費者団体「食品公害を追放し安全な食べ物を求める会」と提携し、40～50種類有機野菜生産、1ヘクタール耕作

〒669-4343 兵庫県丹波市市島町下鴨阪271
TEL & FAX 0795-85-2766
e-mail QZW07502@nifty.ne.jp

いで200羽飼っている。自家用米は合鴨農法で生産している。

以前は鶏も500羽近く飼っていたが、丹波町で鳥インフルエ
ンザが発生して出荷できなくなることも経験し、羽数を減らした。
平飼いの鶏から出る鶏糞は、地域で手に入る米ぬかと農協で購入
する油粕を混ぜ、EM菌と糖蜜でボカシ肥料として利用。これが
主な窒素肥料だ。鶏の飼料は遺伝子組み換えでないトウモロコシ、
大豆かす、その他米ぬか、魚粉、牡蠣殻を給餌し、野草や野菜残
さを与えている。また近くの酪農組合からいただく賞味期限切れ
の牛乳とヨーグルトを混ぜ乳酸発酵させたものも毎日与えている。
肥料はEMボカシの他、堆肥、牡蠣殻石灰、エコマグ（天然苦
土肥料）などを使用。市島町は、町内に有機堆肥センターがあり、
主に牛ふんで堆肥を生産している。丹波市運営の堆肥センターに
はダンブが数台、マニユアスプレッダーがあり、圃場での散布も
請け負っている。

しかし土壌分析の結果、圃場がリン酸過剰に傾いてきたので、
数年前からうちではコーヒー粕堆肥に切り替えており、野菜収穫
後、圃場に草を生やしてハンマーモアで裁断し、堆肥やその他の
有機資材を利用し土づくりにとめている。私は堆肥センター運
営委員の委員長も務めており、地域でのより高品質な堆肥の生産
を目指している。

充実している市島町の新規就農者研修生制度

堆肥センターの他、有機農業の歴史が長い市島町では、有機農
業生産者に対するさまざまな施策がある。町外からの新規就農者
に対しての研修生制度が充実しており、地域内には30軒余りの新
規就農者が点在、その多くは有機農業や自然栽培を実践している。
丹波市内には生産者が集まり「丹波市有機の里づくり協議会」を

設立、お互いの出荷先の情報交換の場になっている。

また、会では年に2回ジャパンバイオフィームの小祝政明氏を
招き、土壌分析の講習会が開催されている。今年、4月から市島
町内には「みのりの学校」が開校し、有機農業技術を学ぶ教育機
関も市が運営する予定である。

うちの農場でも過去何人も研修生を受け入れ、その多くは丹波
地域に定着し、自身で農場を運営している。自分の体験から、研
修生は数か月の基本的な研修後、地域内で自分の圃場を探し、う
ちの農場で週の半分は手伝いながら自分の畑でも体験し学ぶ方式
をとっている。また丹波市有機の里づくり協議会にも積極的に関
わるように進め、他の新規就農者からも学び、自分の経営を確立
していくことを支援している。

兵庫県は、県独自の安心・安全ブランドを認証する一方、有機
農業も推進しており、将来県内の有機圃場1000ヘクタールを
目標数値に掲げている。県の「環境創造型農業」委員会に私も生
産者として出席している。

県と有機農業団体、認証団体、生協など有機農業に関わる団体
によって構成されている「兵庫県有機農業ネットワーク会議」もあ
り、毎年神戸で有機農業映画祭を開催し、啓発活動を行っている。
NPO法人兵庫県有機農業研究会では消費者、生産者が有機農
業を広げる活動をしている。最近では有機農業講座を開催、現在は
自然栽培の指導者・道法正徳氏を年2回お呼びし、主に野菜、果
樹の剪定の勉強会を開催している。

W W O F のホスト農場として年平均45名受け入れ

うちの農場は私自身が以前有機農業の国際活動をしていた関
係で、海外から様々な人々が訪れる。農場はW W O F (World-



WWOOFのみなさんと稲刈り

Wide Opportunities on Organic Farms ウーフ 有機農場で働きたい人)のホスト農場にも登録し、年間約15か国、平均45名程の農場体験希望者が農場に滞在している。フランス、英国、ドイツ、米国、カナダ、オーストラリア、中国、タイ等から常時2〜3名来て農作業を手伝っていただいている。また、アジア諸国の農村からPHD協会 (Peace Health Development / 草の根レベ

ルの人材交流・育成を提唱している神戸のNGO)を通じ研修生を受け入れており、各国との交流が盛んである。

私自身も国際有機農業運動連盟 (IFOAM) のアジア理事に就任していた期間があり、農場を経営しながら国際会議に出席し、約20数か国を訪れ、各地で有機農業の生産者と交流し、海外の有機農業の技術や状況を学んできた。

平成26年には大雨による大災害が起こり、うちも圃場が水没し壊滅状態に陥り、一時は農場の経営も諦めなければならぬ事態になった。幸い早くから有機農業の仲間、消費者会員、ボランティアが来てくれて、家周辺の泥や圃場のゴミの撤去をしていただき、どうにかまた農場を再開することができるようになった。しかし地域内には今でも災害の爪痕が残り、復旧が続いている。

異常気象による災害の増加は、今後の農場経営の大きな課題であり、災害に強い有機農業を目指す必要があるかと思う。